Some Observations on Education and the Learning Process

Alice Christine Grube

教育と学習過程に関する所見

日本とアメリカの教育には共通点も多いと思いますが，私が日本で学んだこと，観察したことを含めて，アメリカの事情について感じた事を述べてみたいと思います。

まず第一に，アメリカの歴史的背景について，第二に，教育心理学の観点から，第三に，日本の教育について感じたことの（三つの方面から），考えたいと思います。

〔I〕歴史的背景 (Historic Background)

(A) 特徴 (Salient Background)

初めに，アメリカの教育の特徴ですが，そこには国家の管理がありません。故に各50の州は，自分の教育の責任を完全に果しており，計画，設備等はすべて各州の責任であります。

これには，長所と短所があると思いますが，日本の文部省とは，異なった組織です。

第二に米国では，小学校と中学，高校まで授業料はなく，国家の費用で賄います。

(B) 主なる教育の様式 (Major Types)

① 伝統的な教育（Traditional Education）

アメリカの伝統的な教育は，主に母国から受け継がれたものであって，特に英，仏，独から相続された権威主義の教育であって，理性や記憶を重んじるものでありました。

② 漸進的・進歩的教育（Progressive Education）

次に，米国では進歩的な教育の応用と実践に強調をおくものでありまして，1908年からフレーベル派（Froebelian*）やペスタロッチ派（Pestalozzian**）の目的中心教育（Object-centered Education）が，普及される様になりました。

③ 他の教育（Other Education）

他の学校施設として，職業訓練の学校，夜学，成人教育などの設備があります。成人教育について述べると，大都会には小学校のみ卒業した人には，その上の課程を学び，中高の教育を受けた人には大学程度の教育が受けられる大人のための教育組織があります。そこでは学生の半分位は大人で特別の教育を受けており，免状を得ればそれで終りという考えはありません。また，学校の教師でも，学士号のみの人には修士号まで学ぶ事を要求され，修士の学位をとらぬと職を失う事もあります。都会など，特にカリフオルニアでは，社会事業家やケースワーカーでも修士（MA）課程の教養は要ります。経験をつんだ宣教師でも休暇で帰国したときなど教育に関係のある人は必ず，その都度大学に入って学んでいます。（私も学士課程（BA）よりも，大学院の方で長く学んでおり，帰国の都度，併せて8年間学びました。）

(C) 人物（Personalities）

日本と同様有能な学者が多く現れており，これらの人々の教育論を知る事も

---

* 註1 Froebel, Friedrich（1782—1852）ドイツの幼児教育学者で幼稚園の創始者。幼児教育実践の理論化に生涯を献げた。

**註2 Pestalozzi, Johann Heinrich（1746—1827） ルソーの影響をうけたスイスの教育者。開発教授と呼ばれる児童の自発性に基く成長援助という概念に従って教授法を発展させた。（筆記者註）

重要であります。

① コント（August Comte），1798—1857

18～19世紀のフランスの実証主義者（Positivism）で，この人の思想は，大ていの教育の土台になっていると云ってよろしい。結局自然現象以外のものは，除外される事になるという考えであります。

② ピアース（Charles Sanders Peirce，1839—1914）

実用主義（Pragmatism）の理論を始めた人で，19～20世紀の心理学者であります。

③ デューイ（John Dewey，1859—1952）

19～20世紀の哲学者，心理学者で最初，シカゴ大学で，のちにコロンビア大学に移りました。

④ ジェームズ（William James，1842—1910）

19～20世紀の心理学者，哲学者で，ハーバード大学の教授で「心理学の原理」という著述で有名です。

⑤ ソーンダイク（Edward Lee Thorndike，1874—1949）

19～20世紀の心理学者，教育学者でコロンビア大学での動物実験は，教育心理学の起りと云われます。

⑥ ゲゼル（Arnold Lucius Gesell，1880—1961）

19～20世紀の臨床心理学者で，エール大学の心理学者（MD）で，デューイと同様，児童発達臨床研究（Clinics of Child Development）で有名でありました。

これらの人々は，教育の改革者であり，高い峰であります。音楽で云えば，バッハ（Bach）やブラームス（Brahms）とか，そういう人達の様にアメリカの教育に大きな影響を与えました。

〔Ⅱ〕教育心理学（Educational Psychology）

(A) 定義（Definition）

教育心理学とは，児童の教育の土台となっている心理学的要因に関係してい

ます。そして，学校は，学習者個人の可能性の発展をどの様に強化する事が出来るかを示そうとするのがこの学問であります。心理学は教授の基礎であり，それはあたかも医学に対する生理学の様なものであります。

(B) 困難点（Difficulties）

教育心理学を一貫した教育訓練として提示するための困難性は，種々の原因から起っています。それは，多くの学者があり，種々の制度が有り，実験も色々なされたので，短い時間に全部を語る事は困難で，ここでは表面的なもののみに終りますが許して下さい。

(C) 理　論（Theories）

しかし，これらの教育心理学の理論の述べているところは次の通りです。

① 動機づけ（Motivation）

児童が愉快に有益に学ぶ様に，又自分の可能性を充分にひき出すことであります。例えば，私は一度ロスアンゼルスのキャリフォルニア大学（UCLA）のボート作りを見学にゆきましたが，教室で子供さんはじゅうたんの上に坐っており，真中に先生はほかけ舟をもっています。朝，児童は舟を作り，先生は子供達に質問をしました。この帆の長さ，色はどうですか。白ですか，青，黒はよいですかと。子供の自分の考えを自分で引き出す方法であります。こういう方法でものを覚え，理性的よりも直観的に学ぶ方が必要であるという学者の思想であります。

自分の経験を申しますと，コロンビア大学の言語学を学んでいた時は，36の異る場所にある学校の教授法を見学してレポートを書きました。時間が一年間かかり，自分の目で見て考えました。授業の方法は，学校ごとにみな異りその形態も多種多様であります。小学校のコア・システム（Core System）というのは，理性的ばかりでなく，直観的に行ないます。読み書き，算術は科目として別々に学ぶのではありません。例えば小学校では，自動車の歴史と製造方法の一つのみを半年位かけて見学にゆき，辞書をひき，百科事典をひき，種々の方法で勉強させられます。また話し合います。

大学においては，ゼミナーと云えば学生は本当に学問的に研究して，レポートを出さねばなりません。レポートに対し質問したり，討論をしたりする時間もあります。順々にゼミナーで報告をし，これがMAという学位論文になったりします。ゼミナーは，徹底的に勉強するものです。私は，大阪女学院のゼミナーに合う様な目的で，婦人問題(Women）という題で学生に研究させています。学生は，百科辞典から日本語で学び，この頃は英語でもしていますが，この様に経験的に実力を出す方法が，ゼミナーだと思います。最近は，英語のレポートを非常に上手にやっています。こういうのがよい心理学的教育であると思うのです。

② 成　熟（Maturation）

成熟には色々な目的があり，大人になる事です。学校のカリキュラムの中ばかりでなく実際の経験が必要です。例えば一緒に計画する会合をもったり，後で掃除をさせて責任を持たせ，大人になる経験をさせるのであります。

③ 個人差（Individual Differences In Abilities）

この問題は，小学校でもある基準を満たすまでに充分時間をかけることで，例えば6年生の勉強の水準に達するまで6年生に残ります。早く進むものはすぐ中学に入りますが，おくれているものには容易に免状をあたえません。免状を受けられるものは，勉強は出来ていますし，卒業する時はすべての課程を完了しています。おくれているものもある目標に達するまで残って勉強するのです。私の参観した時，友人はある精神遅滞のクラスをもっていました。生徒のあるものは，2，3年かけて6年生の課程をすませました。時間をかけて勉強させ，能力に個人差のある事実を認めて本当に勉強出来る様に考えています。（先生は忍耐が必要と思いますが）能力に個人差のある事が研究で解りましたから。勿論，大阪女学院で Oral が，A，B，Cと段階になっているのは，この問題を実際に考えていることで，各個人に応じた教育をしている事になります。

(D) 各々の理論と貢献について（Individual Theories and Contributions）

ここでは，本当の心理学の講話ではないので，非常に簡単に述べますが，次の学者はどういうことを，教育に関して強調し貢献したのかを考えましょう。ソーンダイク（Thorndike）は，理性的でなく経験的に色々な方法で理解し，身体で経験して学ぶことについて語ります。またデューイ（Dewey）もよく似た事を述べ，行為する事により学ぶと云っています。少しづつ角度は異るが，みな同じ様な事を申しているのであります。また，ゲゼル（Gessell）は，色々な本をかき，子供のくわしい研究の結果，発育の問題で身体的及び言語的機能の発揮される時期や順序を発見しています。また次の様な書物の中で色々と説明しています。すなわち1945年の "How The Baby Grows"（子供は如何に成長するか）という書物の中に多くの写真があり，半年間のうち，いつどの様に発育し，どうなるかをこまかく研究し，報告しています。

何がいつどの様に出来るかについて細かく書かれてあり，アメリカの母親たちはよく読みました。1946年には "The Child From 5-10"（5～10才の子供）が出され，1956年には "Youth-The Years From 10-16"（10～16才の青年）が発表されています。また，School with Provisions for Exceptional Children という学校を設立し，一般の教育問題の貢献者でもあります。続いて，ジェームズ（W. James）も，生理学的基礎の上に，心理学理論を展開しています。此の時代の人は皆，肉体的な土台を大切に評価します。

ソーンダイク（Thorndike）は，学校の学習の問題を主に研究したので学童の算数や読み方及び心理測定等の能力テストの点で貢献しました。又，1913～14年には，3巻から成る教育心理学（Educational Psychology）というテキストを出しました。勿論このほかに沢山の学者はあるのですが，アメリカでは，これらの人々の考えや思想が何かにつけて応用されているのです。つまり学校のあり方や先生達の考え方に対してこの人達は特に有意義な貢献をしています。

だから，つまり学校の生徒は，本当に教育に参加いたします。先生の話ばかりきかずに，討論であっても演習であっても，生徒の参加によって学習をして

いるという考えを強調しています。その点では確かに進んでいますが，然しどこまで実用主義，実証主義的方法が全体を支配しているかを考えねばなりません。これらの人々は殆ど宗教を拒み，超自然的なものを疎外し，むしろ科学的なことを重んずると思います。宗教は，自然現象ではないから疎外するというアメリカの教育の一般傾向があります。キリスト教国であると云われましても，現実にはそうであります。パスカル（Pascal, B.; 1623-1662）は，科学と宗教に橋をかけました。パスカルという人は貴重な人物と思います。何故ならここに例としてあげた人々にはこの橋は，かけられませんでした。次は，デューイ（John Dewey）について述べます。

すなわち，教育心理学を一生懸命考えて，デューイの実験学校（Laboratory School）は 1896年に始まりました。80年位前のことです。New York の Horace Mam School という様な大変有名な学校では，子供の参加する教育コア・メソツド（core method）や，見学を重視して自然博物館や，プラネタリアムにつれてゆき（ニューヨークによいプラネタリアムがあります），帰って来て自らの経験を話させる教育がすすんでいます。

また，その他にも1912年にゲシュタルト心理学（Gestalt Psychology）が紹介されました。（ゲシュタルトには，Max Wertheimer, Wolfgang Köhler, Kurt Koffka など3人の学者がおります。）この人達の強調した思想は，ものを理解するのに部分部分を学んでも，よく解らず全体を考えねばならないという一つのまとまりを重んじ，今までの人達と角度が違うのであります。例えば，この学校に私が40年前に入って来た時，英語を中等学校で教えましたが，文法は一週間に3時間，会話2時間，英作文はまた別の時間があり，私は，これに対し反発を感じました。「会話ばかり教えてはどうですか」と私は云いました。しかし勿論それは受け入れられませんでした。「文部省がなかなか保守的でとても，その様な考えには至りません」と返事をされました。私はその頃まだゲシュタルト心理学は学んでいませんでしたが，すでにその様な考えを持っておりました。1932年に日本に到着したあと10年経ってのち，初めてゲシュタルト

心理学を，私は大学院で学び大変嬉しく思いました。何故ならばそれは私の以前の考えを実証したからです。

けれどやはりあとで勉強した時にゲシュタルトによれば，この様に教え方を分けてはいけないと思いました。コロンビア大学の語学々校に文法の時間はありません。ゲシュタルトでは部分的に学んでも全体は解らないと考えます。部分部分の分析をすると全体の事が解らない。例えば，右の目をあけて人さし指を見て下さい。左の目をあけて見ると手の指は動くので，片目で，ある部分だけをみても全体はわからないのであります。

〔Ⅲ〕日本の教育の感想（Education in Japan）

私は，日本で教育を受けていませんので，ここで述べる事は簡単なものにとどめます。

① 日本の教育は伝統的教育だけの様にみえます。

② また，日本の教育は，教育のための教育でなく，免状をもらうための教育とも云えると思われます。

③ また授業の出欠問題があります。アメリカの大学は一学期に2，3回しか欠席が許されません。大阪女学院短大では⅓です。東京の学校では，殆んど生徒は学校に行っていません。何故そんなルーズなシステムか分りません。これでは心理学的にも教育は出来ません。

④ 外国から来た私の友人の見解も全く同様であります。例えば，桃山学院の Gibson 氏の Education in Japan という大阪の英文毎日のシリーズの文章にも同様の意見が出ています。

⑤ 次に勉強の意欲の欠除の問題があります。本当に教育を受けようと云う人の割合はどうですか。

⑥ 道徳的態度の欠除で免状のための勉強であるようであります。即ち倫理的に不足です。学生は，初め，ゼミナーのレポートでも充分立派なものを作った人がありません。何か研究しようという意欲がなく，ただ点をもらったらい

いという風であります。パスする点数も60点は低いと思います。私の時代は75点でした。Shirley Rider 先生も70〜75点であったと云われます。私は，80点がAときいて，びっくりしました。Aは90点でしょう。少なくとも88です。

No flunking !

⑦ また学生は，社会問題に対して興味を示さず，新聞雑誌を読んでいません。同和問題でも研究しようとする人が，何人いますか。

⑧ 最後に，学生は発言することを致しません。出来ないのか，しないのか，はづかしいのか，時々名前をよばずに手をあげてもらいます。前期はよく手をあげますが，後期は毎年手をあげなくなります。就職問題など色々と関心がありすぎて学究的に過している様にみえません。これは30分の話ですから，あとでゆっくり討論したいと思いますが，どうか皆さんのご意見などをお聞かせ頂きたいと願っています。

附記，これは，1973年12月5日の本学短大教授研究会におけるグルーブ先生の講演を，そのまま口述筆記したものです。原稿製作については山崎専任講師を煩わせました。